

令和元年 10 月 28 日

活動・報告者：西上あゆみ・舎利倉幸香

1. 活動日時

令和元年 10 月 28 日（月）6：00~16:00

2. 活動場所

茨城県久慈郡大子町、常陸大宮市、水戸市（茨城県看護協会）

3. 活動の実際

6：30 大子町避難所訪問（8:00 まで）

保健師の活動に同行、昨日と同じ避難所を訪問した。

避難所に入所している方々の自宅は全壊または半壊、独居の高齢者などが多く、生活の再建には一層のエネルギーを要する方々が避難所での生活を余儀なくされている状況であった。今回の災害について、昨日の担当とは異なる保健師の所感は、今回のような災害対応は大学での講義経験しかなかったため、活動が始まったころは、初めてのことやわからないことが多く戸惑うこともあった。初動時のことについて、床上浸水宅や、65 歳以上、乳幼児、妊産婦の安否と健康状況の情報収集のためローラー作戦を実施した。

当日は月曜日であり仕事に出勤される方が複数いた。保健師は出勤する住民から健康チェックを開始した。腰痛が悪化し活動時に腰痛が増強するようになったため病院受診すると保健師へ申し出ていた。また、連日眠れていない住民が多く保健師のヒヤリングの後に「眠れる訳ない。状況が変わらないのだから。」などの不安と怒りが滲む言葉が聞かれた。ストレスが蓄積している状況である。住民の中の 1 人は、自宅での生活を一日でも早くできるようにするため、連日泥水が被ってしまった衣類や寝具、タオルなどを大量に洗濯を繰り返している。ストーブをつけたままにして自宅内いっばいに干してきたと話している。健康チェックの内容を町の 3 人の保健師で共有できるよう名簿表に情報を記載している。また、健康チェック後は共有トイレ内の環境確認や食堂スペースの環境確認と、弁当の内容などを確認している。さらに、管理人に健康チェックの時間内に来られなかった方や、すでに出かけた人の様子を聞き取りしている。

避難所の管理運営は当該施設の管理人が担当している。元来、施設利用する学生がいる場合は、学生の生活の支援をしている。このため、共有スペースの清掃や急病人が発生した場合の救急要請、手当についての経験を持っていた。この管理人に話を伺う。

「入所している方の名前は全員覚えるように努力した。今は完全に住民が仕事や片付け作業に出かけるときや戻ってくる時間帯には必ず受け付けコーナー周辺にいるようにし表情や服装、歩き方など体全体を見て異常はないか確認しながら声をかけるようにしている。このことを繰り返していると小さな変化に気付くようになり、声のかけ方を敢えて変えるようにした。そうすることで、入所者がぼつりぼつり不安に思っていることや体調の不調な

ど機微な変化について話を始める方がいる。この話に耳を傾け、時に背中を擦ったりしながら話したいだけ話してもらっている。こうするだけでも入所者の人の表情が晴れたりして、かわるんですよ。保健師さんに必要な時は情報提供してます。」と話す。

またこの管理人は東日本大震災の際にも当該施を避難所開放したため、被災者の受け入れと管理者役割を務めた経験があった。この時は他県の被災者の受け入れだったが、今回は地震が居住している町の人達が入所しているため、話を聞くことで町の人々の苦しみが生々しく伝わり、ショックも一段と大きい面があると話す。管理人も大子町に暮らすが、自宅の被害はなく現在はこの研修センター内に泊まり込みで管理運営している。もし、自らが被災したとしても避難所の管理運営を優先にしていたと思うと話し、役割意識の高さを感じた。ストレスや身体的疲労が蓄積してないか尋ねると、人のためになることを行動することは苦痛ではなく今までの生き方もそうであったと回想している。夫婦で管理運営しているため互いに励まし合いながら、入所者の方に寄り添い運営していきたいと考えている。体調不良者が発生した際には、その相談受けながら家族と一緒に対応をしており、救急車要請の判断を実施していた。急病が円滑に病院受診できるよう行動していた。

10:00 袋田駅周辺の浸水域

台風 19 号によって袋田駅周辺は大きな被害に遭い、JR 袋田駅周辺は橋梁が落下した。住宅地も浸水被害があり、その様子を確認した。

11:50 常陸大宮市総合保健センター

保健師からの話では、大子町と異なり、医療機関へのダメージが少なかったことは幸いであった。透析の医療機関の被災も系列病院への移動で対応した。福祉避難所についてすぐに需要があった為、開設はしたが、すぐに閉所となった。福祉避難所への入所が必要な方はケアマネを通じてショートステイなどでも対応してもらった。断水がおこった。避難所はすぐに開設されたが、自宅の清掃中に避難者が釘を踏んだというきっかけから保健師による健康相談を 10 月 17 日からはじめた。避難者が自宅から避難所に戻ってきてからの健康相談が必要になると考えた。避難者の方の都合を考え、当初から 19:00-22:00 で相談を受けるように開始し、訪問時も続けていた。そこで夜間対応の為のシフトを作った。保健師は避難者対応だけでなく、避難所の環境、衛生面にも気を配る必要がある。マニュアルにはトイレ掃除などについても記載をしており、それに基づいた対応を行っている。訪問時、市内の避難所は数カ所で、各避難所には 1 名から約 20 名、避難されている方がいる。市は 5 市町村の合併でできており、保健センターの支所毎に避難所が残されている。このセンター近くの避難所については、先週は熱発があったが、血圧が上がっている方も出てきている。

保健師の対応に関しては 311 のときは手探りであったが、フェイズ毎のマニュアルが必要であるとの認識であり、市役所を巻き込んでのマニュアル作成がすすめられ、2019 年はじめには作成がすすんでいる。夏に偶然ではあったが、今回の被災地域で防災訓練（久慈川で

の氾濫を想定)が行われていたため、参加していた。常陸大宮市は5市町村の合併があり、今も支所には保健師が1名ずつ残っている。このセンターが中心ではあるが、災害時の連絡網として支所との「防災ライン」が作成されている。先の訓練やマニュアル作成、防災ラインを通じて情報のやりとりを行う事ができ、役に立った。保健師の記入用紙についても県のもを参考に市のマニュアルに定めている。災害発生後、民生委員を通じて要支援者の安否確認を行い、700名以上の方が上がったが、介護保険利用者、在宅支援利用者をのぞいた約200名を保健師で確認することになった。10月18日より他地域の数名保健師を派遣してもらい、10月21日までに確認を終えることができた。これからは地域住民の健康管理も必要になる。

所感

- ・管理人であることからの役割発揮と使命感により管理者の「支援する心」が入所者を支えていることが分かった。さらに避難所の管理運営する人と保健師の協力体制を構築することができるかと住民に対し細やかな支援を可能にすることとなる。
- ・施設提供側の管理者が避難所運営することで、避難所の生活自体の支援レベルが高くなるが、運営管理者の負担も同じく心理的身体的に増大しやすいため、管理者へねぎらいの言葉をかける存在がいることなど、その支援体制についても重要性が高いと感じた。
- ・常陸大宮市を伺うことで、大子町と同じ県内であっても避難所の運営や閉所への考え方が異なると感じた。これは市町の背景に合併があるかどうかや医療機関などがどの程度被害を受けているかによって異なると思われる。しかし、いずれの避難所においても被災者の方の生活を考え、早朝や夕方、夜間を利用して行う保健師の健康管理の様子を教えていただいた。

写真：袋田駅周辺

